3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

Science. Value. Life.

私たちの競争力は、Science。
創造的なソリューションをもたらす最先端のテクノロジー

三菱ケミカルグループのサステナブルな成長を支える原動力として、社会に価値をもたらすイノベーションを追求した経営（Management of Technology）を推進しています。基礎研究から生産技術に至るまでの高い技術力、豊富な知的財産、そして時代の新潮流を取り入れるオープンイノベーションにより、革新的なソリューションの創出を加速していきます。加えて、デジタル技術を活かすことで、研究開発の加速、バリューチェーンの最適化・効率化などを進め、経営効率の抜本的な改善を図っています。 イノベーション戦略 ▶P.45

©GRAFILM
Science & Innovation Centerに新研究棟を開設

デジタル戦略 ▶P.49

リチウムイオン電池（LIB）用電解液のScience

電極表面の性質を変化させる発明で、長寿命・高性能化を実現

2000年代から長寿命・高出力な車載用電池の開発に取り組み、従来の常識であった、電解液の組成変更ではなく、電解液にわずかな添加剤（ジフルオロリン酸リチウム）を加えて電極表面の電気抵抗を減らすことで大幅に出力を向上する手法を発明しました。それにより、従来トレードオフであった長寿命化と高性能化の両立が可能になりました。

この発明は学術面においても大きな影響を与え、これ以降、電極表面改質技術に関する議論が、産業界のみならず学術界でも活発に行われるようになりました。

3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

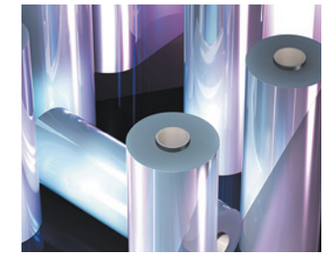
Science. Value. Life.

培ってきた技術力を活かし、ディスプレイ用部材を多数開発しています

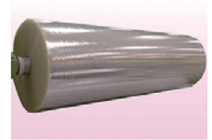
三菱ケミカルグループは、広範な事業領域で基盤技術と独自技術を培ってきました。中でも光学用ポリエステルフィルムは、世界トップシェアの約20%を有し、グローバルに拡大する市場に対する供給能力の確保と高度化するニーズへのソリューション提供に迅速に対応し、さまざまな工業製品の進化を支えています。

そのほか、偏光板用基材フィルムや導光板、光学用粘着シート、反射フィルムなど、ディスプレイに適した機能部材を幅広く展開しています。

光学用ポリエステルフィルム
世界シェア
約20%

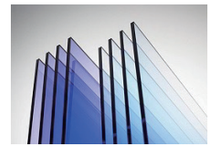


主なディスプレイ用部材



「OPLフィルム」

偏光板の基材として使われる光学用PVOH(ポリビニルアルコール)フィルムです。このフィルムを使うことで、鮮やかに映像や文字を表示できます。



「アクリライト」

看板やディスプレイ、大型水槽、導光板などさまざまな分野に使用されているアクリル樹脂板であり、導光板グレードは表面品質に優れ、さまざまな光源において明るく均一な照明を実現します。

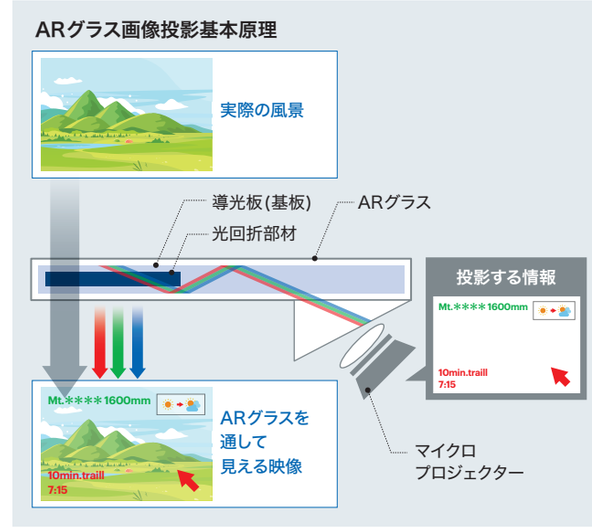
「クリアフィット」

タッチパネルなどの各種ディスプレイの層間を充填する透明粘着シートです。ディスプレイ内の空隙に充填することで二重写りを防止し、コントラストも向上します。

将来に向けた開発品

ARグラス導光板材料(xR関連光学材料)

「ARグラス」は、スマートフォンに続くイノベーションとして期待され、今後の市場の急拡大が見込まれます。MCGグループでは、導光板に用いる樹脂版の開発に注力しています。光学制御技術のケイパビリティを活かし、成長市場であるARグラスで事業拡大をめざします。



3 1章　MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章　持続的な成長戦略
56 3章　ESGの強化
95 4章　財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

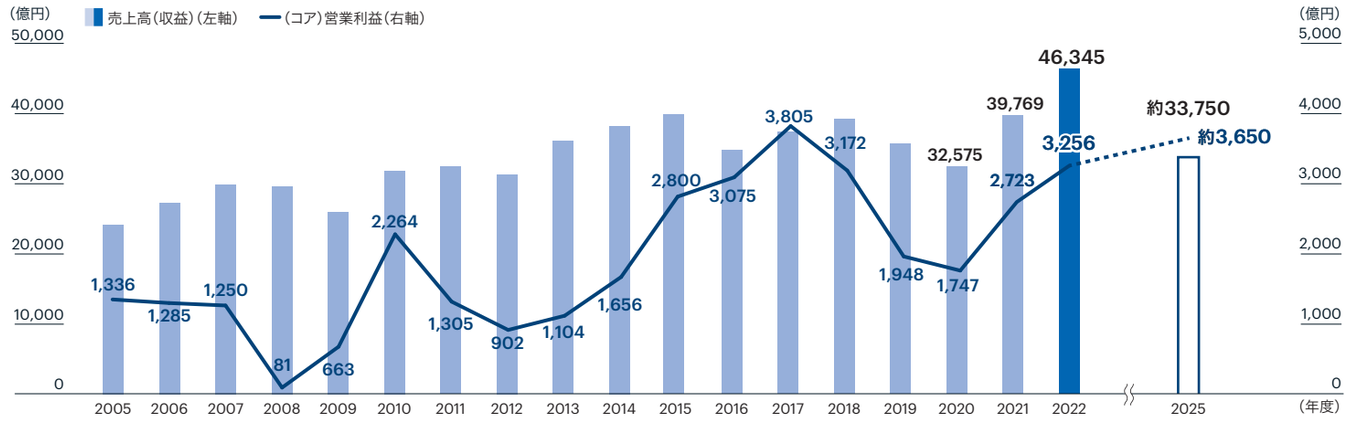
Science. Value. Life.

私たちの生み出すものは、Value。たゆまぬポートフォリオ改革で、全てのステークホルダーに価値を提供

顧客や株主をはじめとする全てのステークホルダーにとっての価値最大化をめざし、経済効率性を重視した経営（Management of Economics：MOE）を推進しています。たゆまぬポートフォリオ改革により健全な財務基盤を構築するとともに、グローバルな主要トレンドを踏まえた成長性の高い市場に経営資源を集中し、合理的な判断に基づく事業運営の実行により収益力を強化していきます。

事業戦略 ▶P.34

売上高（収益）（コア）営業利益の推移



M&A・統合による企業規模の追求、不採算事業の構造改革

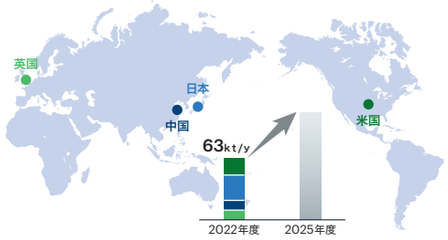
機能商品、素材、ヘルスケア分野の事業を通じて、高成長・高収益型の企業グループをめざす

効率性を追求した事業運営と事業の成長力を引き出す明確な戦略のもと、全てのステークホルダーにとっての価値の最大化をめざす

リチウムイオン電池（LIB）用電解液のValue

LIB市場成長に伴う生産能力拡大

目まぐるしく変化を続けるLIB市場の中で、車載用途を中心とした市場をターゲットと定め、2025年度までにマーケット全体のシェア25%獲得をめざしています。シェア獲得のため、急拡大する需要に対応可能な生産体制づくりと安定した原料調達をグローバルで進めていきます。



3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

Science. Value. Life.

たゆまぬポートフォリオ改革を推進し、持続的に企業価値を向上していきます

中期経営計画とポートフォリオ改革　● 成長施策　▲ 構造改革

				(コア)営業利益内訳実績
2005〜2007年度 革新-Phase2	営業利益 目標 1,400億円以上 実績 1,250億円	医薬事業の比率を高め、景気変動に左右されにくい収益構造へ	● 三菱ケミカルホールディングス設立(2005年) ● 田辺三菱製薬発足(2007年)	機能商品 33% 素材 18% ヘルスケア 46% その他 3% 2007年度
2008〜2010年度 *APTSIS 10*	営業利益 目標 1,900億円 実績 2,264億円	機能商品分野の拡大 高付加価値事業にポートフォリオをシフト	● 三菱樹脂、三菱化学の機能材料事業・関連会社(3社)を統合(2008年) ● 高機能エンジニアリングプラスチック事業のQuadrant AG 連結子会社化(2009年) ● 三菱レイヨン連結子会社化(2010年) ▲ ナイロンチェーン事業撤退(2010年) ▲ 塩ビチェーン・SM チェーン事業撤退(2011年)	機能商品 16% 素材 47% ヘルスケア 37% 2010年度
2011〜2015年度 *APTSIS 15*	営業利益 目標 2,800億円 実績 2,800億円	素材分野の構造改革、産業ガス事業連結化による収益安定化	● ポリオレフィン生産最適化(2014〜2015年) ● 大陽日酸連結子会社化(2014年) ▲ 鹿島(現茨城)ナフサクラッカー 1基化(2014年) ▲ 水島(現岡山)ナフサクラッカー JV共同運営化(2016年) ▲ テレフタル酸インド・中国事業株式譲渡を決定(2016年)	機能商品 27% 素材 36% ヘルスケア 37% 2015年度
2016〜2020年度 *APTSIS 20*	コア営業利益 目標 4,100億円 実績 1,747億円	機能商品分野の成長加速 事業再構築による基盤強化と成長分野への投資	● 三菱ケミカル発足(化学系3事業会社統合 2017年) ● 中東MMA新プラント本格稼働(2018年) ● M&Aによる産業ガスのグローバルシェア拡大(2018〜2019年) ● 田辺三菱製薬完全子会社化(2020年) ▲ LSIメディエンス株式交換によるPHCホールディングス㈱との戦略的資本提携(2019年) ▲ 記録メディア事業撤退(2019年)	機能商品 35% 素材 57% ヘルスケア 10% その他 △2% 2020年度
2021〜2025年度 経営方針 「Forging the future 未来を拓く」	EBITDA 目標 約6,000億円 コア営業利益 目標 約3,650億円	企業価値最大化に向けた「選択と集中」——市場の成長性、競争力、サステナビリティにフォーカスしたポートフォリオへ	▲ アルミナ繊維事業の譲渡(2022年) ● 三菱ケミカルグループへ商号変更(2022年) ▲ 英国におけるMMA生産終了(2023年) ▲ Muse細胞を用いた再生医療等製品の開発中止(2023年) ▲ Medicago Inc.事業撤退(2023年)	EBITDA目標内訳 スペシャリティマテリアルズ 39% 産業ガス 41% ヘルスケア 10% MMA 10% 2025年度目標

3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

Science. Value. Life.

サステナビリティをキーワードに
グローバルな主要トレンドを踏まえた7市場に経営資源を集中します

	EV／モビリティ	デジタル	食品	メディカル	建設・インフラ	消費財	産業
注力市場							
主要トレンド	● 電気自動車 ● 自動運転	● 半導体 ● 高速通信	● 水資源の保全と食品ロス削減 ● リサイクル可能な包装	● 医療費増大 ● 高齢化	● 人口増加 ● エネルギー効率化	● 中間層の拡大 ● 製品寿命の延長	● サーキュラーエコノミー ● 二酸化炭素回収・利用・貯留（CCUS）

3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

Science. Value. Life.

私たちがめざすのは、Lifeへの貢献。人、社会、そして地球のあらゆるもののために

環境問題や社会課題への対応を必須の経営テーマと捉え、サステナビリティ経営(Management of Sustainability)を推進しています。経済成長と環境保全のバランスを取りながら、再生可能エネルギーの利用、LCA(ライフサイクル・アセスメント)の活用による環境負荷の低い製品の開発などを通じて、サーキュラーエコノミーを実現していきます。また、社会課題である持続可能なサプライチェーンの構築、人権の尊重、ダイバーシティ&インクルージョンの促進などに取り組み、サステナビリティを追求していきます。

サステナビリティ推進 ▶P.58 カーボンニュートラル/サーキュラーエコノミーの推進 ▶P.64 人材戦略 ▶P.67 持続可能なサプライチェーンの構築 ▶P.72

ALS患者さんに、新たな選択肢を ▶P.40

水素を供給するHyCOプラント ▶P.39

リチウムイオン電池(LIB)用電解液のLife

EVの高性能化による環境負荷低減に加え、スマート社会の実現にも貢献

当社が開発した電解液は、エネルギー損失の抑制につながることから、環境負荷低減に貢献できる製品として、今後ますます存在感が高まると考えています。また、EV、HEVの普及を通してCO_2やその他の排気ガス抑制にも貢献します。

さらに、新たな移動サービスであるグリーンスローモビリティーの低コスト化や高機能化をめざすMaaS(Mobility as a Service)への親和性が高いほか、スマートグリッド向け蓄電池にも好適と考えられ、スマート社会の実現に貢献する製品として期待されています。

3 1章 MCGグループがめざす姿
4 社長メッセージ
9 グループ理念
11 価値創造モデル
KAITEKI実現に向けたアプローチ
13 Science
15 Value
18 Life
20 2022年度活動報告
22 2章 持続的な成長戦略
56 3章 ESGの強化
95 4章 財務・非財務情報

直前に見ていたページに戻る

KAITEKI実現に向けたアプローチ

Science. Value. Life.

サステナビリティへの挑戦と貢献を、グループのさらなる成長につなげます

喫緊の課題である環境問題への対応として、GHG排出量削減、環境負荷の少ない製品の拡大、廃棄物・水資源マネジメントなどを推進し、2050年までにカーボンニュートラルを実現します。

例えば三菱ケミカルでは、プラスチック循環を中心とした取り組みを加速しており、さまざまな特性を持つ製品の開発やステークホルダーとの連携による循環システムの構築などを通じ、事業の成長を図りながら、より快適で安心な暮らしと地球環境に資する取り組みを推進しています。

カーボンニュートラルの実現に向けて

欧米の事業所におけるグリーン電力への転換など積極的な再生可能エネルギーの活用により、GHG 排出量の削減に大きな成果を上げています。また、化学産業、アカデミア、地域などさまざまなパートナーとの連携により、循環型社会の実現に向け幅広く取り組んでいます。

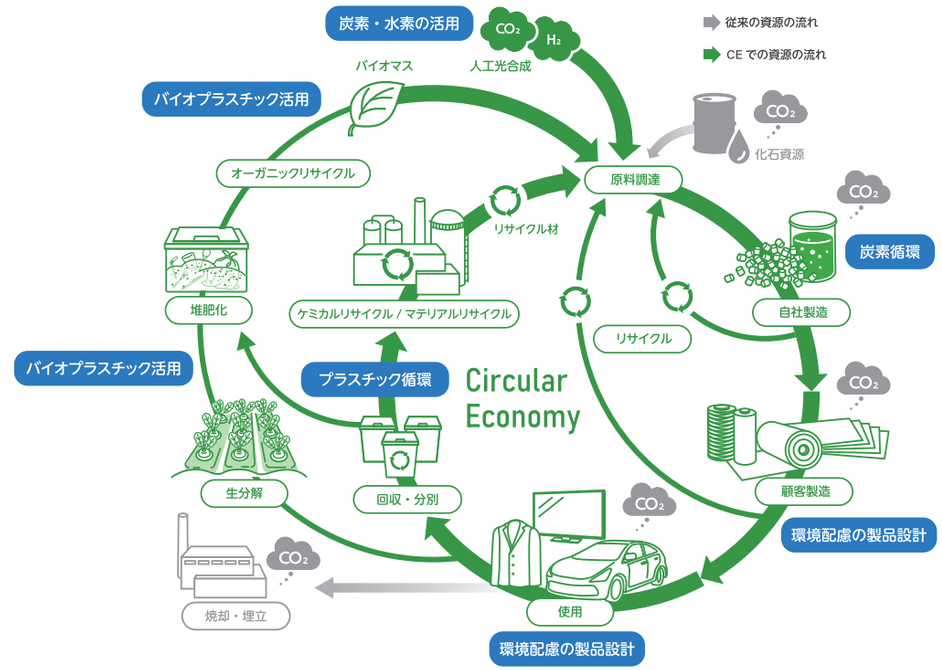
TCFD提言に基づく報告 ▶P.62
カーボンニュートラル／サーキュラーエコノミーの推進 ▶P.64

三菱ケミカルのプラスチック循環への取り組み

プラスチック循環

バイオプラスチック活用
- バイオマスへの原料転換
- 生分解による炭素循環

炭素・水素の活用



LCAの活用

バリューチェーン全体で環境負荷削減へ貢献する製品サービスの強化

LCAの活用事例 ▶P.60

オープンイノベーション、ステークホルダーとの連携

AEPW, ICCA, VBA, WEF-LCET, GCNJ, CGC, CLOMA, J4CE, カーボンリサイクルファンド, ほか

カーボンニュートラル／サーキュラーエコノミーの推進 ▶P.64